

Maxine Berg and Elizabeth Eger (eds.), *Luxury in the Eighteenth Century: Debates, Desires and Delectable Goods*.

Palgrave Macmillan, 2003, xii + 259pp.

森村 敏己(一橋大学)

本書は、1997年から2001年にかけてウォリック大学に設置された Luxury Project の研究成果である。このプロジェクトはすでに、同じく Maxine Berg を編者の一人とする *Consumers and Luxury: Consumer Culture in Europe 1650-1850*, Manchester U. P., 1999. を公刊している。二つの論集はともに18世紀における奢侈というテーマを扱うにあたって学際的アプローチの必要性と重要性を強調するが、それは、奢侈論を道徳哲学や経済思想の領域で分析するだけでなく、物質文化の変容と消費社会の誕生という側面から理解することで、一八世紀のヨーロッパが体験した変化を総合的に捉えようとする意図の現れである。いわゆる「奢侈論争」の理論的な分析は五つのパートのうち、ひとつを占めるに過ぎず、残り四つのパートには、モノとしての奢侈品、趣味や感性、女性の表象、エキゾティズムといったテーマが並ぶ本書の構成は、こうした姿勢を反映している。

多彩なテーマを扱っているとはいえ、少数者による富や社会的威信の顕示である「古い奢侈」と、中流階層の富裕化の結果である「新しい奢侈」を区別し、後者の登場を一八世紀ヨーロッパにおける特徴として捉える姿勢は本書全体を貫いている。『政治論集』において、当初は「奢侈について」と題されていたエッセイを「技芸の洗練について」と改題することで、奢侈に向けられる道徳的非難をかわし、文明の進歩という新しい枠組みの中でこの問題を捉え直そうとしたヒュームの議論は、こうした二つの奢侈の対立を明瞭に示している。それは、「私悪すなわち公益」

というパラドックスに立脚したマンドヴィルの奢侈擁護論、すなわち奢侈を道徳的には悪徳としながらも結果的には公益に適うとした議論への批判でもあった。また、質素・儉約を特徴とする国民性ゆえに富を浪費せず、資本蓄積が可能となり、驚異的な発展を遂げた国としてオランダを描き、一八世紀の奢侈批判論者に影響を与えたウィリアム・テンプレの観察も、この「古い奢侈」と「新しい奢侈」との区別という観点から批判されている。オランダにおいて古い奢侈は外国人の目の届かないところにあり、一方、経済発展の必然的な結果である新しい奢侈は、古い奢侈の概念に囚われたテンプレには奢侈だとは認識されなかったというのである。さらに、1760年代以降、奢侈を擁護する議論が消滅するかのように見える点についても、ふたつの奢侈の区別から説明される。新しい奢侈はもはや奢侈という言葉ではなく、快適さ、新しさ、余剰といった語彙で語られ、批判を浴びる対象ではなくなっていく、それと並行して、新しい奢侈の擁護者は、少数者による顕示的消費への批判という点では伝統的な奢侈批判論者と足並みを揃えるようになったのだという。こうした変化に対応して、奢侈を好み、道徳を腐敗させるという伝統的な女性の表象も、趣味の審判者、快適さと洗練と文明の進歩の原動力という新しい表象の挑戦を受けることになる。もちろん、物質文化と知的文化双方からのアプローチを謳う本書は、新しい奢侈を表す具体的なモノの研究も忘れていない。快適さをキーワードとするコテッジの流行、女性用の書き物機の誕生、中国製品に刺激を受け、その模倣から始まりながらも、幅広い価格帯と多彩なデザインで一部の富裕層に限らず中間層の需要にも対応した陶器の流行など。

本書が強調する古い奢侈と新しい奢侈の区別は、実は一八世紀の論者たちも意識していた。ここで取り上げられるヒュームやスミスに限らず、フランスでも表現の仕方は様々だが、富の不平等に由来する少数エリートの贅沢と、経済発展の影響が広い社会階層に及んだ結果としての豊かな生活とは区別されている。その意味で、本書は新しい分析の枠組みを提示したわけではない。しかし、こうした理論的な区別を、具体的なモノを通じて説得的に示し、さらに趣味や美意識の変化にも結びつけた点はこの論集の大きな成果である。近年の物質文化史研究および消費文化論は、一八世紀の人々が実際に購入し、所有し、生活の中で用いた製品、または着用した衣類および味わった食物や飲料などを明らかにしている。それは、消費文化が変化する様相を具体的な暮らしに即して理解することを可能にしたといえるだろう。本書は、こうした研究に触発され、その成果を土台にすることで、従来からの一八世紀における奢侈論研究の射程を大きく広げることに貢献したと言っていいだろう。